

R. F. ベネディクトの「シナジー」 概念について

三 島 齊 紀⁽¹⁾

1. は じ め に

社会を如何様に良くしていくのか、良い組織とは何かについて真摯に取り組んでいる社会学者は稀有である。そもそも良い社会・組織の定義とは何なのか。そうした所ではそれを可能とせんとする如何なるシステムが見られるのか。そこにいる個々人には、どのような特徴が見られるのだろうか。また、そのための前提条件とは何か。

こうした考察を理想論として一笑に付してしまうのではなく、本気で向き合い続けた研究者の1人として、A. H. マズロー (Abraham Harold Maslow, 1908-70) の名を挙げることができよう。彼は「自己実現 (self-actualization)」の概念を探求したことで広く知られている。しかし彼が同概念の基礎には、「シナジー (synergy)」なる概念があると主張したことについては殆ど知られていない (例えば、論文 Notes on Being-Psychology., *Journal of Humanistic Psychology*, 2., 1962., p. 54. 等を参照)。

彼がこれについて触れている箇所は、ゆうに100を数える。例えば、1965年著作 *Eupsychian Management* において、彼は3章分を充ててシナジー概

(1) 神奈川大学経済学部准教授

R. F. ベネディクトの「シナジー」概念について（三島斉紀）

念について詳述している。また、広く知れ渡った *Motivation and Personality* (1970) の中でも彼は同概念について触れており、更には彼の日記の中でも、彼方此方でこのことがメモ書きされている。

ところで彼は、同概念を文化人類学者 R. F. ベネディクト (Ruth Fulton Benedict; 1887-1948) が編み出したものであると度々記している (例えば, *Synergy in the Society and in the Individual*, *Journal of individual Psychology*, Vol. 20., 1964., p. 153. を参照)。女史は1941年, ブリン・マウア大学 (Bryn Mawr College) でアン・ホワード・ショー記念講演 (the Anna Howard Shaw Memorial Lectureship) を行った際に, これを提唱したとされている。当時の彼は, ニューヨーク・ブロードウェイの西にある72番通りの建物にて, 直接女史から文化人類学に関する講義を受けていた。女史の上記講演の内容は, 後年, マズローと J. J. ホニグマンに加え, M. マーガレット (Margaret Mead) の手により, *Synergy: Some Notes of Ruth Benedict*, *American Anthropologist*, Vol. 72., No. 2., 1970., pp. 320-333. として公刊された⁽²⁾。即ち, より良き社会・組織の在り様を考察したマズローの一底流には, ベネディクト・シナジー理論があることは明白なことから, 彼の「自己実現」概念を精査・把握するためには, まず女史の主張について知らねばならない。

(2) マズローは後に, この講演原稿を紛失したとベネディクトから聞かされた。しかし彼の手元には, まだそれが残っていた。そのため, 彼はこれを女史に返送している。ただ女史が他界し遺品整理を行った際には, この原稿が女史のものからは見つからなかった。ところがこの返送を行う前に, 彼が勤務していたブルックリン大学で院生をしており, 女史が行っていたセミナーにマズローと共に参加していた J. J. ホニグマン (John. J. Honigmann) が, それをタイプ打ちしていたことが明らかとなった (ホニグマンは, 後にノースカロライナ大学の教授に就任)。これにより, 完全原稿ではないものの往時の記念講演内容を公刊することが出来たという。詳細は, Harris, T. G., *About Ruth Benedict and her lost manuscript*, *Psychology Today*, 1970., p. 52. を参照。

2. ベネディクトの略歴

ベネディクトは、ニューヨーク州北部シェナンゴ・バレーの農村で生まれた。ヴァッサー大学を卒業してから社会事業団での勤務を経て、教員、詩人、踊り子等様々な職に就いたが、どれも長続きはしなかった。35歳の時に文化人類学に触れ、コロンビア大学でフランツ・ボアズ (Franz Boas; 1858-1942) から教えを受ける。女史は北米のズニ族をはじめクワキトル族、ドブ島の民族等、幾つもの部族でフィールドワークを行い、その習俗、神話、文化、宗教等を精査した。後にコロンビア大学准教授、そして教授となっている⁽³⁾。

これら広範囲にわたる調査に基づき、女史は、自然科学が様々な生物や鉱物を取り上げ、其々の特性について探求を行っているのにも拘わらず、社会科学は、西洋文化のみに着目し、その影響を受けた人間だけを見て人間の本性を語ってきたと指摘する⁽⁴⁾。そして、人間の本性の真なる理解のためには、広く他の文化にも目を向けるべきであると主張するようになる。とりわけ女史は、幾つかの文化において明瞭に観察される攻撃性の少ない集団や、円滑な協働行為を見せる人々の考え方や行動の基礎となっている「シナジー」に目を向けるよう勧める。同概念を扱った女史の「講義内容」(THE LECTURES)は7つに分かれているため、本稿でもそれに従ってⅠ～Ⅶと分類して概観していきたい。

(3) R. ベネディクト, 米山俊直訳, 『文化の型』, 社会思想社, 1973年, 413-423頁。

(4) Benedict. R. F., *Patterns of Culture.*, Houghton Mifflin., 1934., p. 3.

3. ベネディクトの「シナジー」概念

I “当該文化の中に入り込んで、記録を取ることの必要性（pp. 320-322.）”

女史はまず、文化人類学、なかでも「パーソナリティと文化」の相関関係を知ろうとする際には、当該文化の言語や、同部族の人名や行われる儀式名を知る必要がある、そのうえで、「ある個人についての人生の最初から最期に至るまでの継続した情報」を得ること、また「子供たちが如何様に成長していくかの手法」という日常行動こそを記録していく必要があるという。というのも、そうしていくことで、その文化のもとで育ったその人が、如何なる影響をその文化から受けたのかを十分に理解できるようになるから、とする。確かに、研究室にて子供に紙とクレヨンを与えて、その行動を記録することもできよう。しかしそうした行為そのものが、既に、アメリカ文化における影響力のもとにあると女史は言う。それでは、その子が本来育った当該文化の影響下では、如何様に行動するかに関する知見を得ることが困難となる。いかなる文化においても、部族が彼らの市民性のようなものを作り上げていくことを忘れてはならない、と。

II “原始文化に関する種々のデータは現代社会でも生かし得る（pp. 322-325.）”

Iからの当然の帰結として、これまで提唱されてきた数多の「社会規範論は、その理論を提唱した者が所属する地域の特殊な文化を反映したものに過ぎず」、もって「特定の一次的状況から導出された興味を引く結論」に過ぎないものである、と女史はする。というのも「状況というものには僅かずつだが常に変化しており、以前有った昔々の法律なるものも存在しなくなる」ためとする。換言すれば、「我々はもはや、規範的信仰心など持ち合わせては

いない。社会問題は永遠なる価値という哲学的なものに目を向けることによって解決が得られるという、そうした信仰心はもう持ち合わせていない。永遠なる価値というものこそが疑わしい (We have no longer the normative faith that social problems can be solved by a philosophical appeal to the eternal values. Eternal values themselves are suspect.)。しかし、そうは言っても我々の目の前では、征服のための戦争などがずっと続いている。そうならば、様々な文化の下で育った者たちが、其々どのような人生を過ごしたかについての、所謂「人生結果に関するデータを欲する (we need data on the consequences for human life)」。こうした現実には山積する難題を睨み、例えば、如何様にして「完全なる国家 (the absolute state)」を創ることが出来るのか、何故「征服するための戦争 (wars for conquest)」が生じるのか等についての文化人類学上のデータを積み上げていくことで、我々は考察の糸口のようなものを得られると思われるからであるとする。

ただ、こうした視点に立って研究を行おうとする時、原始部族と現代社会との規模の違いが問題にされがちであるが、その違いは重要なことではないと女史は示唆する。確かに原始的な文化の多くは協働的なものであるが、暴力的なものも存在する。この差は、いかなる「社会的調整 (social arrangements)」を当該文化が構築してきたかが要諦であると女史はする。そうして、「彼らの規模は小さいものの、我々の近代世界にも見られる下図 (ground plans) を持っている」ことにまずは着目されたいと言う。この原始文化にも、今日の文化にも見られるグランドプラン、即ち、その文化をかたどる概案 (下絵) のようなものが幾つかあるとして、ここでは3つ型を挙げている。

「同一性 (homologous)」を文化の概案・下絵として据えると、世話焼き、つまり相手を「満たしてあげようというもの」が表出されがちであるという。一門同士は、互いに真似し合ってお互いが瓜二つようになっていく、と。

R. F. ベネディクトの「シナジー」概念について（三島斉紀）

「そうした共同社会で生じてくる社会難題に対しては、相互に刃を向けあおうとするのではなく、むしろ、お互いが一致団結するという状況を生じさせる」という。こうした同一性なるものが下 ^{グランドプラン} 図 となっている部族では、「容易に共感・感情移入がなされ、我々が言うところの温厚さのようなものが観察される。そうして容易に敵意として解釈されがちな違いや珍奇さに起因する難題を除けている」という。

「相違性 (difference)」。基本的な ^{ソーシャルグランドプラン} 社会 概 案 の 2 つ 目 として あげ ら れ る も の は、集 団 の 相 違 性 に 基 づ く も の で あ る。さ う し た 下 絵 の 代 表 的 な も の と し て は、イ ン ド の カ ー ス ト 制 度」が 挙 げ ら れ る と い う。こ れ は 異 な る、違 う 集 団 が 幾 つ か 存 在 し、そ れ が「高 い 集 団 か ら 低 い 集 団 へ と 等 級 付 け」さ れ て い る と い う 概 案 が 土 台 と な っ て い る も の で あ る。こ の 種 の 下 絵 の も と で は、「相 互 扶 助 を 生 む の が 困 難」と な り が ち で あ る と い う。な ぜ な ら こ う し た グ ラ ン ド プ ラ ン の 下 で は、同 じ も の を 分 か ち 合 う こ と で「社 会 的 連 帯」を 作 り 上 げ て い る 訳 で は な い た め で あ る。さ う で は な く、互 い の 階 級 が 異 な る も の を 提 供 し 合 う と い う「分 業」を 基 礎 と し た「相 互 依 存」に よ り、互 い の 必 要 性 を 確 認 し 合 っ て い る。例 え ば 農 奴 と し て の 地 位 に 甘 ん じ る 代 わ り に、「食 糧、土 地、借 金 を 肩 代 わ り し て く れ る こ と、敵 か ら 守 っ て く れ る こ と」等 が 得 ら れ る。つ ま り、「こ の 種 の ^{グランドプラン} 概 案 は、相 互 に 益 を 受 け 合 う と い う、あ る 種 の 認 識 に 基 づ い て い る。こ の 認 識 が あ る な ら、特 権 が 大 き く 異 な っ た り、富 や 権 力 が あ ま り に 違 っ た と し て も、安 定 的 で 妙 味 の あ る 社 会 を 生 み 出 す こ と に な る」と い う。

「同心円性 (concentric circles)」。「これの典型的なものは、一連の同心円のような形を成しており、その同心円の中心にあるのが個人であり、彼のいる社会が周囲から彼を見ているというものである。南アフリカの某部族では、人はまず自分の家族に囲まれており、彼を取り囲むより大きな部落、つまり兄弟、いとこ、奥さんたち、子供たちという集団によって取り囲まれている」。

同様に「私はまず育った町の市民であり、それと共に私の住む地域、州、そして国家によって囲まれている。私との結びつきは、小さなものから大きなものへと繋がっている」。そうした「其々の小グループは、同じ階層との直接忠誠心 (allegiances) を持ちあうことによって形作られた結びつきが観察される。そして、これが要となって階層を結び合わせていく」。(筆者注；つまり、こうした原始に見られた下 ^{グランドプラン} 図は今日でも見られ、もって規模にばかり注目するという考え方を再考すべきと促している)。

Ⅲ “攻撃性が少ない社会には、ある種の「社会的調整」が見られる (pp. 325-328.)”

ところで、私 (ベネディクト) が、とりわけ「取り組むべき人間行動に関する喫緊の課題は、攻撃性について」であるという。これは、「他者を傷つけることを狙いとした行動、はたまた自分が確固とした者であるということを確認する行動」であり、「怒り、激怒、闘争性、(隠したいと思う) 意地の悪さのようなもの」である。他方で攻撃対象となった者は、「強いられ、痛みを伴う恥をかかされる」。この「強い攻撃性と関連する、もしくは低い攻撃性と関連する社会科学的条件なるものは存在するのだろうか」。結論から述べるなら、「社会科学的に見ると、(各社会は) 其々の下 ^{グランドプラン} 絵に基づき異なってはいるものの、行きつく先は全てが同じである。(中略) 攻撃性が見られない社会なるものは、個々が同じ行動をするという社会規範を有していたり、ないしは、ある人にとって益となることとその集団にとって益となることが同時に起こるようにするという社会規範がはっきりと観察されるのである (societies where nonaggression is conspicuous social orders in which the individual by the same act and at the same time serves his own advantage and that of the group.)」。これは如何なる社会においてさえ、また、どの位大きな規模のものであったとしても、この相互に益を受け合うということに依拠

R. F. ベネディクトの「シナジー」概念について（三島齊紀）

している。つまり、攻撃性が見られないということは、「人々が自己中心的ではなく、個人の願望よりも社会から要請されること」、こういう状況に置かれているが為に生じているのではない。そうではなく、「社会的調整 (social arrangements) が、これら2つの別個のものを1つにしてしまうことによって生じている」。

簡単な例で言うと、ある人が優れた者であり、ヤムイモを上手に育てたり、沢山の魚を取ってくるという生産活動は、社会全体にとって益となる。「彼が優秀であることで、彼の仲間たちも益を受ける」。中央エスキモーには、人々の間で相互に益を分け合う地域がある。「アザラシが村にもたらされる時、その全住人が同時にその配分を受け取れる。アザラシを狩った者は、自分自身の力を現すこととなり、皆が、その達成した事柄に対して最大級の敬意を払う。そうして、村人全員が共に食料にありつけるのである」。こうして、「互いに益を受け合う (mutual benefit)」のである。「私は、こうしたこと全般をシナジーと呼ぶことにする (I shall call this gamut synergy)」。この語は、「医学においては、其々が別の行動をするよりも、より良い結果を生み出す混ぜ合わされたもの、例えば、神経中枢、筋肉、精神活動、治療力が混ぜ合わさったようなものを意味している (In medicine it meant the combined action of nerve centers, muscles, mental activities, remedies, which by combining produced a result greater than the run of their separate actions.)」。勿論、「シナジーは我々がここまで述べてきたような、^{グランドブランス}様々な下図に沿う形で、其々違う仕方で見出される」。

しかしながら世界の別の場所では、こうした相利共生とは言えない、上の特権的な利益のために、鉄の鞭棒と搾取によって部下たちをものにしていく社会も見られる。こうした「低いシナジー」しか見られない原始社会では、誰かが何かの事において優秀であるということは、結果としてその人は、得られるもの全てを手中にすることの意味している。「他者を打ち倒し

て恥をかかせ、それをアピールし続ける」。「低いシナジーの見られる文化」における「社会構造は、相互に敵対し合い、また反発し合う行動が生じがちである」。

上述した「同質性」グランドプランに基づいた「協力的な社会では、社会規範がシナジーを生むための確固とした土台を提供している」。そうしたグランドプラン
 下 絵を持つ社会では、例えば、「自分自身の親族からなる集まり、また彼の階級層や彼の村、彼の部落等が、彼が不義理なことをしない限り、彼のことを助ける」。「この種の同一化は（中略）、食糧を分け合い、共に狩りをし、共に祖先への祈りを捧げ、兄弟が妻を得ることを助け、また、結婚費用を支援してあげるものである」。「その人は、己が有する個人的願望に基づいて行い、成し遂げた共同活動によってこそ、相互に益を受け合えるということ、そういう生き方を目の当たりにしていく。そうしてその人の考え方と行動は、生涯を通じて形作られ、修正もされていく。つまり、彼にとって良いことは社会にとっても良いこととなるということを彼に確信させていく。彼が達成したことは、彼のいるグループにとっての誇りとなり、彼のいるグループの名声は、彼にとっての自慢となる」。「人間の本性に関する我々の論議は、こうした社会学的設定を生じさせていく、何らかの行動を含んだものへと一層広げていかねばならない（Our theories of human nature must be wide enough to include the kind of behavior that occurs in such sociological settings.）」のである。

こうした高シナジーが見られる部族では、他の部族の者と結婚し、その他所者の血が混じるということは、「他から来た遺伝子を持つグループとも強い結びつきを持つことができること」を意味している。結果として、自分たちのグループが益を受けるだけでなく、そうした別の「血が混ざり合うグループに対しても（中略）益となるよう行動するようになる。このことは、部族をより広げていく、つまり同一化を拡げていく（wider identification）」こ

R. F. ベネディクトの「シナジー」概念について（三島斉紀）

とになる。現代社会で言えば、そうした「社会は、利益を分け合い、リスクをともに受け合う、株式を持ち合う企業のように」である。その中にいる者たちは立場も違い、能力も、有している富も異なるが、それでも「上手に株式を持ち合いながら企業運営をしているかのようである」。

今日の国家は、自国の利害関係ばかりを主張している。まさに「アナーキーである」。しかし、こうした「小さな部族にですら観察される相互利益を提供し合うというメカニズムが（中略）、国際紛争なども無くし得るものとなるだろう。「規模に拘わらず、平和の基本的な条件となるものは、相互に益を受け合うための連盟を作り上げること」に依るのである。

他方で、「異質性」という（同質性とは異なる）違った仕事を分業し合い、それを相互交換するという「階層的な下絵」を有する文化のもとでは、「攻撃性が多発、ないしはそれが見られない社会」の両方が観察される。この差は、「彼らが相互に益となるようなサービスに寄与しているか」にかかっている。異質性を敷く社会は、そもそも互いが全く異なるバラバラなものを提供しあうという社会学的難題を内包している。その差は非常に大きなものであることから、あるグループのサービスに対する引き受け手が見当たらないなら、階級AとBは反目し合うことになる。

しかし、そうした異質性下^{グランドプラン}のもとにあっても、高いシナジーを示す部族は確かに観察される。その際の要諦は、立場にあらう。例えば、「バソングでも階層が見られる。それにも拘わらず争い事は殆ど見られないのである。というのも王にとっての益が臣民にとっての益となり、臣民にとっての益は、王様にとっても益となっているからである。王は責任を負っており、その地位に即して無責任ではいられない。彼の家族の財は部族の財なのである」。

IV “高シナジーを生み出す配分手法 (pp. 328-330.)”

上述してきたように、その個人が何故その行動をとったのかを我々が理解するためには、「全ての伝統的な制度の相互作用を知る必要がある。つまり子供の育て方、経済規範、性に関する決まり、タブー」などの塊全体であるが、そうした事実にも拘らず、あえてベネディクトは、以下より経済と宗教という2点を抽出して考察したいとしている。なぜなら、非常に有用な事柄を提示できるためと女史はする。まずは、経済(利益配分手法)から。

「原始的な経済秩序なるものは、2つの主要な型に整理できよう。1つ目は、漏斗システム (the funnel system)」である。これは、その「コミュニティが生み出す全てのものが(中略)富んだ人へと集まる」という、まさに漏斗(筆者注; 全てを飲み込むかのようなシステム)である。具体的に言うなら、「持たないということは、土地を借りることによってのみ食糧を得ることが出来る。彼らはその地を借りなくてはならないため、高い利子を支払い、借金が増えていだけとして運命づけられている」。もって、この土地持ちの「裕福な人は、一層豊かになり、貧しい人は更に貧しくなる」。

しかし、「この漏斗システムの中にいる誰一人として、安心感を得ることはできない。その人は、彼を襲おうとする他の豊かな者たちからの危険から逃れることはできないからである(中略)。そのため彼は不安を感じる。彼の安心は、(中略)隣の者よりも遙かに多くの財を持つことによるのみ得られるのである」。そのため彼が寛大な人間だろうが悪人だろうかに関係なく、他者を打ち倒す者となっていく。というのも「システムそのものが、非人格的に機能しているために(中略)その人は競争し続けるよう駆り立てられるからである。そうした豊かな者に対抗するため、貧しい者たちも過度な競争をしたり、他の貧しい者たちに打ち勝とうとします」。

しかしながら、そうした「漏斗システム経済」が見られる部族においても、「時に比較的高いシナジーが成されている」ことが観察される。人が貧しさ

R. F. ベネディクトの「シナジー」概念について（三島斉紀）

故に自らを売り奴隷になったとしても、それでも衣食住が必要なことは明らかである。そうした社会では、「生活の糧として必需品と言える物すべてが、漏斗の中に落とし込まれている訳ではない」。一例として「封建制度のもとにある主人は、彼の下にいる農奴から益を受けるが、彼もまた農奴たちに対して責任を持っている」。彼らが食べていけるよう彼らを守るのだ。そうして「主人と下層の者とが相互責任」を負うことで、「安定した妙味のある社会を作り出してきている」。

2つ目の「卓越した経済秩序を生み出す型として、サイホン・システム (the syphon system)」と女史が呼ぶ仕掛けがある（筆者注；ここで言う syphon とは、サイホンの原理を指す。これは2つの水槽間を管で繋いだ際に管の中が液体で満たされると、2つの水槽の水位が同じになろうとする現象である。始点と終点における液面の高さの差が重力による位置エネルギーの差となり、液体は管内を移動するというものである。応用例としては家庭用ストーブに灯油を移し替えたりする際に用いられる）。「これは、富が過度に集中している箇所から定期的に水路を通して分配されるかのような、また、幾つかの集中している箇所から配分されるシステムであり、もってコミュニティ全体へと富が行き渡る、そういう経済である」。「もしある人が土地を所有しているなら、その隣人たちまでもが共に集まって一生懸命働き、その土地の所有者も種を植え、鋤で耕し、刈り取りのシーズンを皆で共に迎え、共に食べ、共に喜ぶのである（中略）。ある人が肉を持っていたり、庭で馬や牛を飼っているなら、その人の手を介して部族の人たちへと行き渡ること以外には、その有していた人に目立った何かが与えられることはない。ただし部族は、その多くのものを分配してくれた人に立場を与える。そうして、その所有していた者に対し名誉や財を与える」。また「もし、そうした社会が非常に困窮に陥った際には、コミュニティの全員が、その間、彼らが出来る限りのベストを尽くすことで、それを切り抜けようと協力し合う」ことが観

察される。

V “部族のシナジー度合を映し出す鏡としての宗教 (pp. 330-332.)”

宗教は、廉直さのようなものを生み出すものであるから、それを尊重すべきであるという考え方は誤りである。そうではなく宗教は、彼らの生活の中で生じる「協働や、攻撃性を転写している」という意味で注目すべきものである。

良い事を行おうとする意志は、日常生活の中で教え込まれるものであり、宗教によって現し示されてくるものではない。もし、彼らの社会で温かみや廉直さのようなものが教え込まれているなら、まさにそのようなものが、部族の人々によって反映される。他方、そうではない教えが叩き込まれるのであれば、まさにそこにいる人々の悪意に満ち満ちた言動が、その宗教という名のスクリーンに映し出されることになる。

具体的に言えば、「高シナジーが見られる社会では、部族全員にとって益がある事柄のために祈り、踊り、歌うことでその宗教が成り立っている。雨が降りますように、豊作でありますように、鮭が昇ってくるように、子宝に恵まれるように、健康であるように、四季が確実に移り変わりますように……と祈る」。また、そうした「高シナジーが見られる部族における魔除けは、他者に危害を加えるものではなく、ある人を強めるためのものである」。

他方、自分を「他者のために費やしたところで、何らかの益が得られるわけではないという事を日々の生活の中で何度となく経験している低シナジー部族」においては、彼らの生活の基礎にある攻撃性という慣例が宗教に反映されている。例えば、「彼らが魔除けを行う際には、ある人が死ぬようにとか、凶作になるようにと願う。彼らが魔力や呪文を用いる際には、仲間の部族の者が、飢餓、天然痘、象皮病、発狂するようにと用いる。彼らが守護霊を用いる際には、戦いにてライバルが殺されるようにと願い求めるのである」。

R. F. ベネディクトの「シナジー」概念について（三島斉紀）

Ⅵ このように、「ある特定の文化の中にどっぷりと浸ることの結果として、当該者は、特定の性格構造を持つようになる」（p. 332.）。

Ⅶ 恥に関して、2つの手法が見られた。一方は、「恥を取り除くことを可能とする技術（既に）個々が持ち合わせており、更なる高い名声を得る」というものであり、他方は、そうした仕掛けが見られなかった。どちらも、何処でも観察されるものであるが、「そこに住む人々に対して大きく異なる性格構造を作り上げるよう機能する」（p. 332.）。

4. むすびにかえて

上記からベネディクトの要点は以下になろう。まず、我々の目の前にある戦争を如何にして止めることが出来ようか、また、完全なる国家を如何様にして作り上げていくことが出来るのかを考察することが女史の研究の主目的とされていた（Ⅱ）。勿論、それらの営為の主体は人間であり、それら個々の背景を知ろうとするには、彼らが育った文化を知る必要がある。というのも、人の行動の基礎となる性格構造は当該文化全体から大きな影響を受けているからである（Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ）。ところで、それら各文化にはグランドプランとも言うべき、その文化の土台となる概案（下絵・下図）が見られる（Ⅱ）。それには同質性、異質性、同心円性等があるが、とりわけ上記のような、人の攻撃性について考察しようとするなら、こうした^{グランドプラン}下図よりも注視すべきものがある（ただし「同質性」が見られる「協力的な社会では、社会規範がシナジーを生むための確固とした土台を提供している」（p. 326）ため、そもそも人の攻撃性を少なくさせる）。即ち人の攻撃性如何は、その人が所属していた文化のシナジー程度に依るという点である（Ⅲ）。こうした力動論・全体論的な視座を基に、女史によるシナジー概念に関する上記までの言葉は、次の5つに纏められよう。

(ア) 定義 — 女史は、「彼にとって良いことは社会にとっても良いこと」という「2つの別個のものが同一化してしまうこと」をシナジーと定義していた。その原義である医学用語における各部位や治療力までもが合一して機能することをイメージするよう促し、詰まるところ、自と他が合一、また利己と利他が統合する状態のことを指しているとしていた(Ⅲ)。

(イ) 前提条件 — このような高シナジーを可能とする前提として、「ある人にとって益となることとその集団にとって益となることが同時に起きる」という「相互に益を受け合う」「社会的調整」や「社会規範」なる仕掛けこそが必要であるとしていた(Ⅲ・Ⅳ)。

(ウ) 効果 — こうした高シナジーが見られる所では、人々の攻撃性が薄まるだけにとどまらない。互いに助けあうこと、互いに責任感を持ちあうこと、知恵を出し合って共に危機的状況を切り抜け、共に喜ぶこと等が観察されるようになるともしていた(Ⅲ・Ⅴ)。

(エ) 応用 — このような高シナジーは、家族や部族単位だけではなく、その市、州、国、世界全体へと同心円的に広めていくことが可能であるとしていた(Ⅲ)。

(オ) 低シナジー — 女史は、高シナジーとは明らかに異なる状態についても述べていた。そうした所では、強い者に全てが集まり、それを手中に収めるものの、まさにその者でさえもより豊かな者から打ち倒されはしないかと常に不安を感じるとしていた。その不安感をかき消すために、その人は一層自己中心的に行動し、強い攻撃性が観察されるようになるともしていた(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ)。

ただし上記までを概観すると、「同心円性」グランドプランと永遠なる価値などない……とする女史の言葉に対し、次のような疑問が浮かんでくる。「同心円グランドプランの核となるものは何か」という点を考えてみた時、

R. F. ベネディクトの「シナジー」概念について（三島斉紀）

Aという同心円が作り上げる国家群と、それとは相容れないBというものを核に据えて同心円を作り上げた国家集団が、時間の経過と共に異質・階層性状態を作り上げ、提供するものに相互便益があまりないという齟齬状況が生じることがあり得よう。こうした際、両者がぶつかり合う懸念が出てくる。そう考えると、女史が言うように時代は変わるのだから、そうした全階層を貫く、時空を超えた絶対的価値や、哲学など何も無いの一言で済ませて本当に良いのだろうか。⁽⁵⁾ “何を基軸として” 同心円を築き上げていくのか、如何なる方向へと共に目を向けるべきなのかに関するベクトルのようなものを真摯に探求していくことを安易に放棄すべきだろうか。

この点について言えば、マズローも同じことを考えていたように思われる。別稿にて、上述までのベネディクト・シナジー概念を彼が如何様に受容したのかについて考察していくこととしたい。

※ 学生時代にはじまり現在に至るまでずっと、小生は、河野昭三先生から数多くの助言を頂いてきた。ここに記し、謝意の一端を表したい。

(5) この点に関する優れた文献として、以下を推奨したい。河野昭三、「経営学は‘無用’か？－その存在意義を考える－」、『経営学の学問性を問う』、日本経営学会論集第84集、2014年、81-90頁。